

開成社創立 135 周年記念

「開成社ものがたり」



合名会社 開成社



めいじじだい 明^{めい}治^じ時^{だい}代^{だい}のは^はじ^じめ^め、郡^{こおりやま}山^{やま}は、人^{ひと}や荷^{にもつ}物^{ぶつ}が行^ゆき交^かう街^{かい}道^{どう}沿^ぞいが栄^{さか}えていたほ^のか^はは、野^の原^{はら}
が広^{ひろ}がり、雑^{ぞう}木^き林^{ばやし}が生^おい茂^{しげ}るところで^した。新^{しん}幹^{かん}線^{せん}もバ^くスもあ^はりま^しせん。車^{くるま}だ^つて、走^{はし}
てい^こない頃^{ころ}のこ^{げんざい}と^{ざい}です^{ざい}か^ら。現^{げん}在^{ざい}のよ^うに、た^ひく^とさ^あん^つの^す人^{ひと}が^あつ^まり^り住^すむよ^うに^なった^のは
「荒^あれ^ち地^たを^が耕^やし、暮^くら^しを^{ゆた}か^にに^しよ^う!」と^いう、開^{かい}拓^{たく}の呼^よび^けが^あった^から^です。こ^れは、
ふる^さと^のた^めに、そ^の開^{かい}拓^{たく}に全^{ぜん}力^{りき}で取^とり組^くんだ、郡^{こおりやま}山^{やま}の商^{しょう}人^{にん}25^{はな}人^{にん}のお話^{はなし}です。

やすば なかじょう おおつきばら こうほち けつゐ 安場と中條、大槻原を候補地に決意

とくがわばくふ にほん おさ えどじだい お めいじしんせいふ じだい くにじゅう さむらい はん きゅうぎん
徳川幕府が日本を治めていた江戸時代が終わり、明治新政府の時代になると、国中のお侍は、藩からの給金がなくなり、暮らしは大変厳しくなりました。そこで、新しい国づくりを進めていた明治政府では、東北と北海道の
こうだい とち ちゅうもく あたら た はたけ つく しごと さむらい かぞく すく かんが
広大な土地に注目し、新しい田んぼや畑を作る仕事で、お侍とその家族を救おうと考えました。

とうじ こおりやま にほんまつはん しゅくばまち りよかん しょうてん なら かいどうぞ にぎやか こうがい じんか
当時の郡山は、二本松藩の宿場町で、旅館や商店が並ぶ街道沿いには、賑やかさがありましたが、郊外は人家
しず さと みかいたく のほら たがや こおりやま おお はってん ふくしまけんれい やすばやすかず
もまばらな静かな里でした。「未開拓のこの野原を耕せば、郡山は大きく発展できる!」…福島県令・安場保和と
てんじ なかじょうまさつね でけいやま め まえ ひろ あさかへいや みわた かいたく じつげん おも えが
典事・中條政恒は、出磐山のとっぺんから、目の前に広がる安積平野を見渡して、開拓の実現を思い描きました。

やすば ふくしまけん ふにん まえ せいふ しせつだん くわ いみん かいたく かっき み
安場は、福島県に赴任する前に、政府の使節団に加わって、移民たちの開拓で活気づくアメリカを見えています。
かんだう にほん も かえ こおりやま おお かいたくじぎょう な かんが
そのときの感動を日本に持ち帰り、ここ郡山で、大きな開拓事業を成しとげたいと考えたのでした。

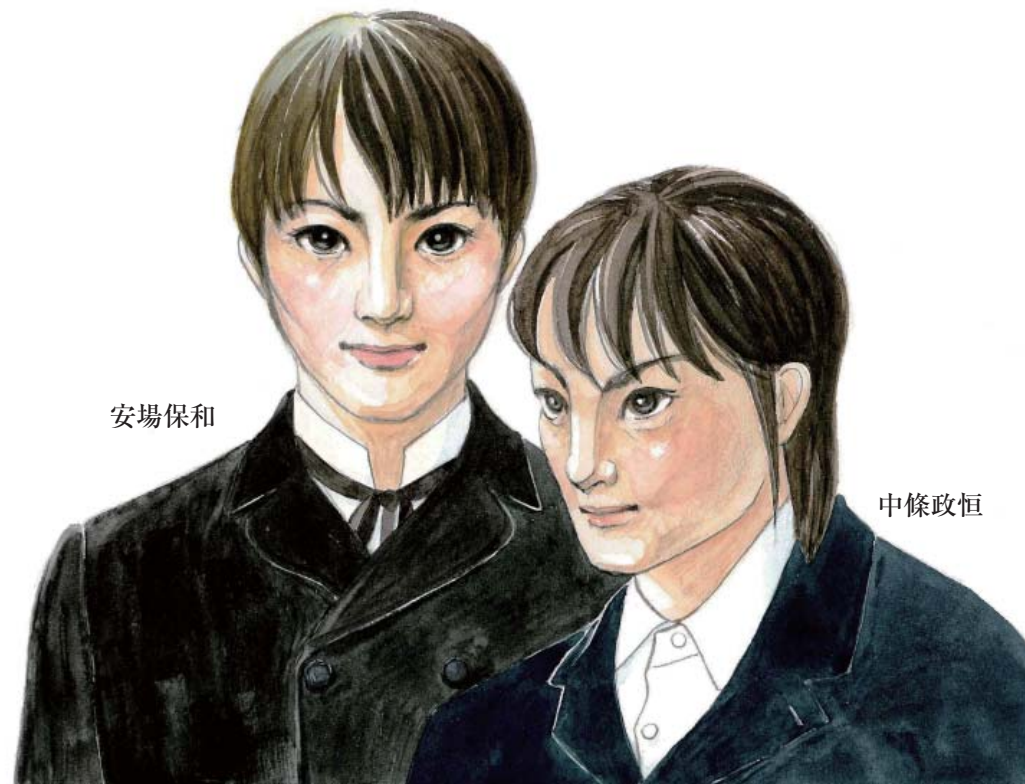


のこ 残った25人

しかし、^{こうだい}広大な^{とち}土地を^{たがや}耕すには、^{ばくだい}莫大な^{かね}お金と^{じんりよく}人力が^{ひつよう}必要です。
当初、^{とうしょ}県は、^{けん}主に^{おも}二本^{にほん}松藩^{まつはん}のお侍^{さむらい}であった人々に^{ひとびと}呼びかけて、^{いま}今の^{かいせいざん}開成山^{いったい}一帯にあたる、^{おおつきばら}大槻原^{かいたく}の開拓を^{けいかく}計画しましたが、^{おも}思うように^{ひと}人が^{あつ}集まりません。そこで^{なかじょう}中條は、^{こおりやま}郡山^{だいしょうにん}の大商人・^{あべもへえ}阿部茂兵衛や^{しぎはらやさく}鳴原弥作、^{はしもとせいざえもん}橋本清左衛門らに、^{かいたく}開拓が^{ひつよう}必要だと^{なんど}何度も^{はな}話して^き聞かせました。^{なかじょうまさつね}中條政恒は、^{あさかかいたく}のちに「安積開拓の父」と^{ちち}呼ばれる、^よ功^{こうろうしゃ}労者です。

やがて、その^{ねつい}熱意に^{こころ}心を^う打たれた^{だいしょうにん}大商人たちは「わかりました。私^{わたし}たちは^{しょうばい}商売が^{かぎよう}家業ですが、^{ゆた}ふるさとが^{しざい}豊かになるためなら、^{とう}私財を^{かいたく}投じて^{じつげん}開拓を実現させましょう」と^{けつてい}決意しました。

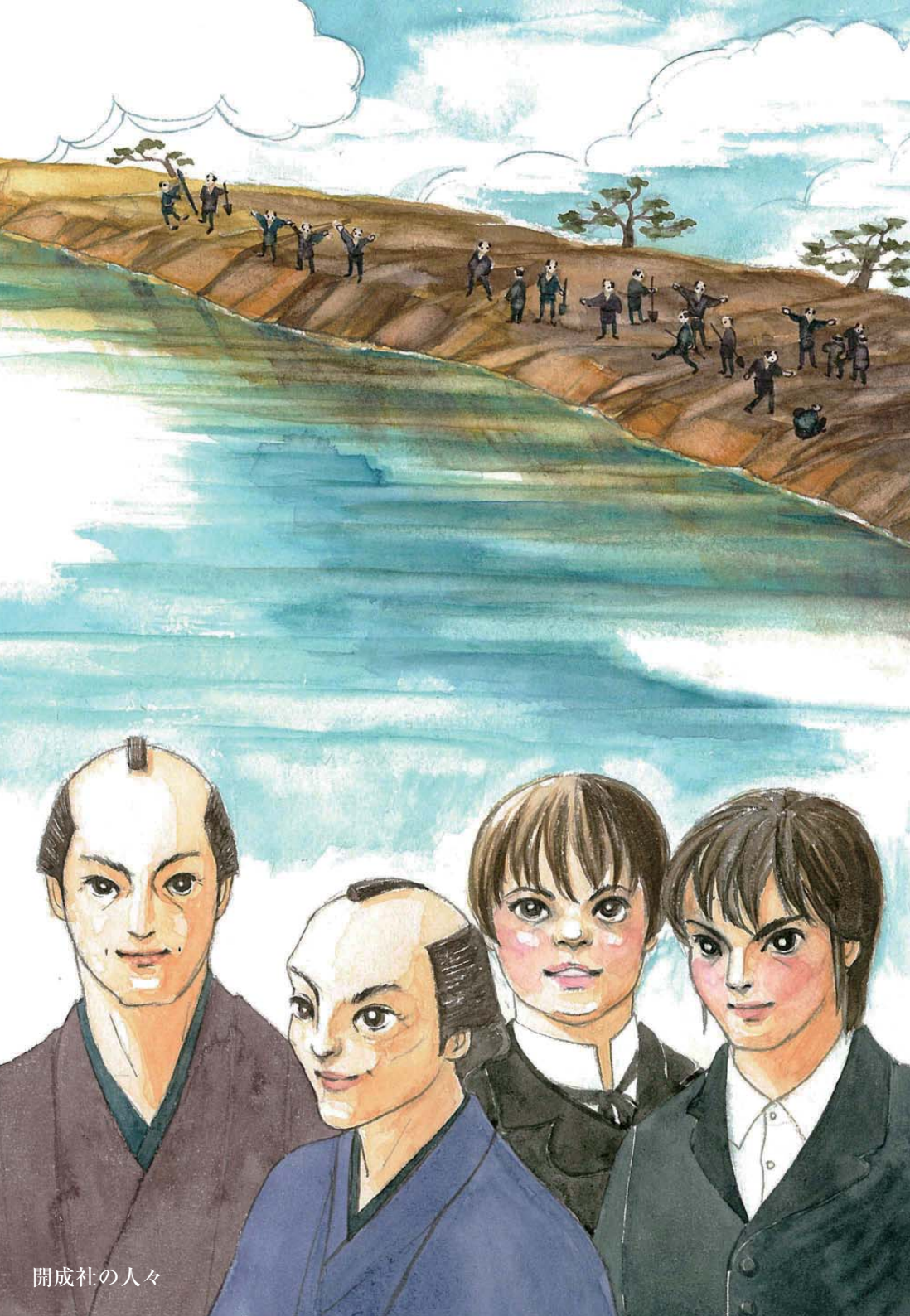
さっそく、^{なかじょう}中條は、^{じゅうみん}住民の^と取りまとめをしていた^{いまいずみきゅううえもん}今泉久右衛門に^{こえ}声を^{じゅうみん}かけ、^{あつ}住民を集めて^{かいたく}開拓への^{さんかせつめいかい}参加説明会を開かせました。すると^{はたら}「働く^{ばしよ}場所ができるぞ!」「^{きゅうきん}給金がもらえるそうだ!」と、^{かいじよう}会場には^{にん}200人^{ひと}もの人がおしよせました。



安場保和

中條政恒

ところが...。中條の話では、開拓に参加するには、まず^あ荒れ地^ちを買わ^かなくてはなりません。「^{たし}確かな^{しゅうかく}収穫など^{のぞ}望めそうにない、^あ荒れ地^ちにお金^{かね}をは^らら^{ひとびと}払うなんて!」と、人々は最後まで話を聞かず「^{はなし}だめだ、^{むり}無理だ」と^い言っ^{つぎつぎ}て^{かえ}帰^{はなし}って^{とお}しま^おい^{のこ}ました。話がひと通り終わったところで、^{さいしよ}残^{なかじょう}っていたのは、^{あべ}最初に^{ふく}中條が^{にん}といた、^{あべ}阿部らを含め、25人。いずれも、^よ阿部^{あつ}らの^{こおりやま}呼びかけで^{みらい}集まった、^{おも}郡山^{しょうにん}の未来を^{とき}思う、^{にん}商人たち^{あさかかいたく}でした。この時の25^{だいじぎよう}人が、^{かいせいしゃ}やがて安積開拓の^{せつりつ}大事業につながる、開成社を設立するのです。



かんがい用池作り

なかじょう かいたくち くわ き う ちゅうしん かんが くわ
中條は、開拓地に桑の木を植えることを中心に考えました。桑の
は 葉は、カイコのエサとなり、カイコはきちょう きぬいと つく ころ
福島県は、絹の大生産地として知られていました。

にん しょうにん すいでん つく こめ しゅうかく かんが
しかし、25人の商人たちは、水田を作り、米を収穫したいと考え
ました。とうじ あさかへいや ごひゃくがわ おうせがわ ふじたがわ ささはらがわ なが
れていましたが、た はたけ すいりょう じゅうぶん まいとしかん
被害を受けていました。水の取り合いで、たびたび争いもありました。

かいたく みず かくほ かんが あべ
「開拓のために、まずは、水を確保しなければ…」。そう考えた阿部ら
しょうにん すいでん みず ひ おお ようち
商人たちは、はじめに、水田に水を引くための、大きなかんがい用池
をつく き
を作ることを決めました。

こうじ まいにち にん にん やと さぎょう きゅうきん
工事には、毎日300人もの人が雇われて作業にあたり、給金は、
げんきん こめ しはら
現金とお米で支払われました。

しゅうい 和メートル およ いけ かいせいぬま なづ やく かげつ
周囲が1kmにも及ぶこの池は「開成沼」と名付けられ、約10ヵ月
かんせい ご だいぶぶん う た いま かいせいざん
で完成しました。その後大部分が埋め立てられましたが、今も、開成山
こうえん にしがわ い す ず こ のこ
公園の西側に、五十鈴湖として残っています。



大久保利通

開成社は、政府より認定をうけました

かいせいしゃたんじょう 開成社誕生

かんがい^{ようち}用池ができて来ると、本来^くの目的^{ほんらい}である大槻^{もくてき}原^{おおつきばら}の開拓^{かいたく}開始^{かいし}にそなえ、商人^{しょうにん}たちは、独自^{どくじ}の組織^{そしき}をつくる^{つく}ことが必要^{ひつよう}だと考える^{かんが}ようになりました。明治^{めいじ}6年^{ねん}11月^{がつ}、そうして誕生^{たんじょう}したのが「開成社^{かいせいしゃ}」です。

「開成^{かいせい}」とは、中国^{ちゅうごく}の古い書物^{ふる}にある言葉^{しょもつ}「開物成務^{かいぶつせいむ}」のことで、「万物^{ばんぶつ}を開発^{かいはつ}して事業^{じぎょう}を完成^{かんせい}させること^{こと}」を意味^いしています。中條^{なかじょう}は、この言葉^{ことば}を心^{こころ}の支え^{ささ}に開拓^{かいたく}の大事業^{だいじぎょう}に励み^{はげ}ました。彼^{かれ}にゆかりのある土地^{とち}や学校^{がっこう}には、「開成^{かいせい}」の名^なが今^{いま}も残^{のこ}っています。中條^{なかじょう}の思い^{おも}を受けとめて立ち上^たがった阿部^あ茂兵衛^{あべもへえ}らも、それにちなんでこの名前^{なまえ}を付け^つけたのでしょ。う。

開成社^{かいせいしゃ}を組織^{そしき}したことは、いくつかの規則^{きそく}とともに県^{けん}に報告^{ほうこく}され、県^{けん}はこれを国^{くに}に伝^{つた}えました。このとき、明治政府^{めいじせいふ}の内務卿^{ないむきやう}であった伊藤博文^{いとうひろぶみ}から、規則^{きそく}について、いくつかの質問^{しつもん}や意見^{いけん}がありました。開成社^{かいせいしゃ}では「開拓^{かいたく}に参加^{さんか}する人^{ひと}たちが、意欲^{いよく}を持^もって、代々^{だいたい}仕事^{しごと}を続け^{つづ}られるようにとの願^{ねが}いを込^こめて、規則^{きそく}を定め^{さだ}ました」と返答^{へんとう}。それからしばらくして、内務卿^{ないむきやう}・大久保利通^{おおくぼとしみち}より、開成社^{かいせいしゃ}を認定^{にんてい}する知らせ^しがとど届^{とど}きました。明治^{めいじ}8年^{ねん}6月^{がつ}のことでした。

荒れ地^あに水^ちを引き、新た^あに田畑^{たはた}を耕^{たが}すことは、人々^{ひとびと}の暮らし^{たす}の助けとなるため、明治政府^{めいじせいふ}が力^{ちから}を入^いれた政策^{せいさく}です。開成社^{かいせいしゃ}の25人^{にん}は、「国^{くに}の利益^{りえき}となり、土地^{とち}の人々^{ひとびと}が幸福^{こうふく}になるためなら」と、『国利福民^{こくりふくみん}』『ふるさと開発^{かいはつ}』のこころざしのもと、財産^{ざいさん}を投^{とう}じて開拓^{かいたく}に取り組^とんだのです。

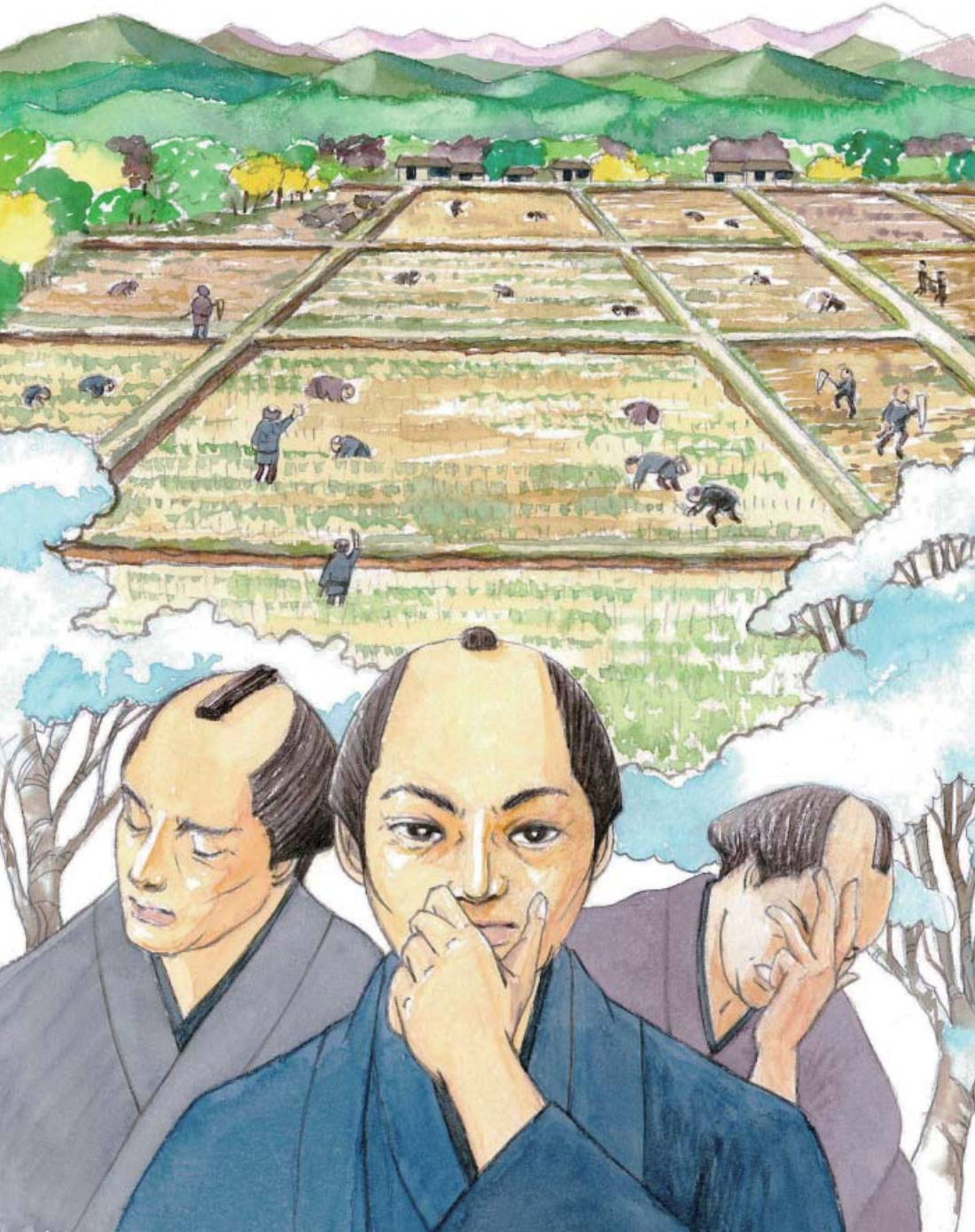


おおつきばらかいたく にゅうしょくしゃぞくぞく 大槻原開拓、入植者続々

かいせいしゃ おおつきばらかいたく さんか ひと ぼしゅう きんりん
開成社が大槻原開拓に参加する人を募集すると、近隣のあちこちか
ひと あつ かいせいしゃ しゅうごうじゅうたく ながや かぞく
ら人が集まりました。開成社では、集合住宅の長屋ではなく、1家族に
けん いえ ようい す のうぎょう いっしょう しごと
1軒の家を用意して「ここに住んで、農業を一生の仕事とできるよう
に」しました。

でんこ よ じゅうたく はい ひ ひやくしゅう こめ しお
「佃戸」と呼ばれたその住宅に入った日から、お百姓には米と塩、
しんぐ しきゅう とち たがや のうぐ
寝具が支給されました。土地を耕すためのスキやクワなどの農具、
ひりょう あた いっしょうけんめい はたら かいたくみん せいかつ
肥料も与えられました。しかし、一生懸命に働いても、開拓民の生活
たいへんきび いっぼう よ あ まえ あせみず お
は大変厳しいものでした。また一方では、夜明け前から、汗水を惜し
はたら ひと いえ しょくりょう め あ はたら
まず働く人が多いなか、はじめからこの家と食料が目当てで、働かな
いなまけ者もいて、開成社の人を困らせました。

ひとびと ちから え かいたく すす たいら すいでん
たくさんの人々の力を得て、開拓は進みました。平らなところは水田
こたか おか やさいばたけ くわ なえつく あ かいこん
に、小高い丘は、野菜畑と桑の苗作りに当てられました。開墾をはじ
めて2年目の明治8年秋には、開拓田から830俵(約5万kg)の米
しゅうかく かいせいしゃ ひと りえき
が収穫されました。しかし、開成社の人たちに利益をもたらすまで
はなりません。お米のできの悪い年もたびたびあり、不作の年
かいせいしゃ あいつ こめ か ゆ ひやくしゅう くば
には、開成社は会津までお米を買いに行き、それをお百姓たちに配り
ました。



くなんおお　みの　すく　かいたく　げんじつ 苦難多く、実り少ない開拓の現実

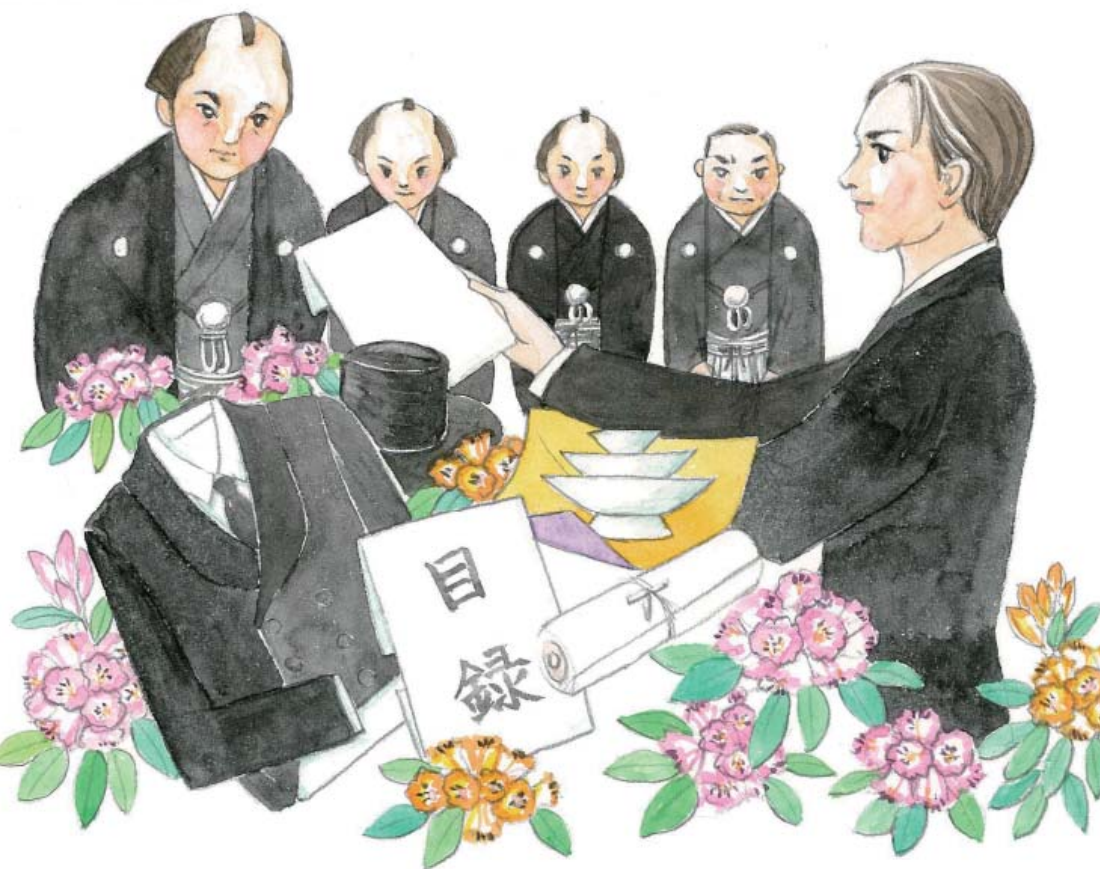
開拓開始から3年もたつと、修理が必要になる施設がいろいろと出てきました。開拓地内^{かいたくちない}にかけられた100もの木橋^{きばし}は、どれも腐^{くさ}りはじめて危^{あぶ}ない状態^{じょうたい}です。開成社^{かいせいしゃ}では、これを石^{いし}の橋^{はし}にかけかえ、また、かんがい用池^{ようち}も修理^{しゅうり}しました。お店^{みせ}で商売^{しょうばい}するのが本業^{ほんぎょう}の商人^{しょうにん}たちでしたが、商い^{あきな}をおろそかにしても、開拓地^{かいたくち}に足^{あし}を運^{はこ}ぶ毎日^{まいにち}が続^{つづ}きました。この頃^{ころ}すでに、開成社^{かいせいしゃ}の25人の商人^{しょうにん}が出^だしたお金^{かね}は、はじめ^{よそう}の予想^{よそう}をはるかに上回^{うわまわ}っていました。その結果^{けつ}、家業^{かぎょう}の商売^{しょうばい}がうまく行^ゆかなくなる人も出^{ひと}てきました。

しかし、25人^{にん}の努力^{どりよく}は、むなしくはありませんでした。この頃^{ころ}になると、荒れ地^{あち}だった大槻原^{おおつきばら}には、田んぼ^たや畑^{はたけ}が広^{ひろ}がり、お百姓^{ひゃくしょう}の家^{いえ}や商店^{しょうてん}も集^{あつ}まって、にぎわい^{かつき}と活気^{かつき}にあふれた、新しい村^{あた}ができつつあつたのです。「みんなの暮らし^{くらし}の助け^{たす}けになりたい」…開成社^{かいせいしゃ}25人^{にん}のその思い^{おも}は、少し^{すこ}ずつ実現^{じつげん}されていました。

開成社^{かいせいしゃ}の人々^{ひとびと}の辛抱^{しんぼう}は、これからまだまだ続^{つづ}きます。開拓地^{かいたくち}からの収入^{しゅうにゅう}で利益^{りえき}を得^えたのは、一説^{いっせつ}には、大正時代^{たいしょうじだい}に入^{はい}ってからと言^いわれてい^います。それは、開拓開始^{かいたくかいし}から40年^{ねん}も後^{のち}のことで、商人^{しょうにん}たちは、それまでに莫大^{ばくだい}なお金^{かね}を工面^{くめん}して、出^だし続^{つづ}けたのです。



福島県庁



けん かいたくしゃひょうしょう う 県より開拓者表彰を受ける

おおつぎばら かいたく かいせいしゃ しょうにん ちい き ひとひと けん
大槻原の開拓につとめる、開成社の商人たちと地域の人々は、県か
らその働きがたたえられることになりました。ある日、県から開成社
へ「これまでに負担したそれぞれの金額、特に功労のあった者を知らせ
よ」との連絡がありました。この時、開成社の社長であった阿部茂兵衛
は「商売の大小もあり、出した金額はまちまちですが、国を良くし、ふ
るさとを豊かにしたいと願う気持ちは、25人ひとしく同じものです」
と返答しました。

めいじ ねん がつ かいたく こうろう ひとひと ふくしまけんちょう まね
明治9年5月、開拓に功労があるとされた人々は、福島県庁に招か
れ、賞状とともに、礼服一式とちりめんの羽織生地などをいただきま
した。洋服などまだ珍しかった当時、このえんぴ服とシルクハットの
礼装一式は、フランス製の貴重なものであったと伝えられています。
かいせいしゃ にん ぐみ ぎんぱい ことば
開成社の25人は、さらに、3ツ組の銀杯とおほめの言葉をいただき
ました。



かいせい かん かりしょうがっこう せ っち 開成館と、仮小学校の設置

めい じ ねん かい たく じぎょう けい かく すす ぐ あい はな あ じ む し ょ
明治8年、開拓事業の計画や進み具合を話し合う事務所として、
かい せい かん た けん ちく ひ かい せい しゃ しょう にん おお
開成館が建てられました。建築費は、開成社の商人たちがその多く
を ぶ た ん ち い き ひ と び と き ふ ひ と び と
負担しましたが、地域の人々からも寄付がよせられました。人々が
げ ん や た が や う つ く た は た い ち め ん ひ ろ た か だ い
原野から耕してできた、美しい田畑が一面に広がるなか、その高台に
あら わ か い だ よう ふう こう そう けん ちく かい せい かん い ふ とう どう あ たら
現れた、3階建ての洋風高層建築の開成館は、威風堂々として、新し
む ら こう ち し ゅ う へ ん で ん こ ぶ く
い村のシンボルになりました。このころ耕地の周辺には、佃戸を含め
い じ ょ う い え に ん ひ と あ たら せい かつ
100以上の家がたちならび、700人もの人が、新しい生活をはじめ
ていました。

かい せい かん かい たく けん で き き かん
開成館はまた、開拓にあたる県の出先機関もおかれて、そののち
つ づ あ さ か かい たく ぜん たい ちゅう しん て き や く わ り は や く し ょ
に続く、安積開拓全体の、中心的な役割を果たしてゆきます。役所や
や く ば じ だ い ご だ い き ぼ かい し ゅ う こう じ お こ な
役場になった時代もありました。その後、大規模な改修工事が行われ、
しょう わ ね ん あ か や ね み ど り ま ど い ん し ゅ う て き げ ん ざ い た て も の
昭和41年に赤い屋根と緑の窓が印象的な、現在の建物になりました。

かい せい かん お な こ ろ しょう が っ こ う かい たく さ ん か
開成館ができたのと同じ頃、小学校もできました。開拓に参加す
る ため い じ ゅ う か ぞ く こ ど も ま な ば つ く
ため移住してきた家族の、子供たちの学びの場が作られたのです。
さい し ょ かい せい ざ ん ゅ う び ん き ゃ く た か む ら さ え も ん じ た く かい ほう て ら こ や
最初は、開成山郵便局の高村左衛門が自宅を開放した、寺子屋のよう
な 物 で し た 。 これ を かり しょう が っ こ う かい せい しゃ ま い と し う ん え い ひ
ものでした。これを仮小学校として、開成社では、毎年の運営費を
し え ん
支援しました。

めい じ ねん かり しょう が っ こ う し ん ちく い て ん かい せい しょう が っ こ う
明治13年、仮小学校は新築移転して「開成小学校」となりました。
き ょ う い ん めい せい と めい さむい い え こ ど も おお ね っ し ん
教員2名、生徒64名。もともとお侍の家の子供が多く、とても熱心
べん が く は げ
に勉学に励んだそうです。



ようはいじょおとりいせつりつ 遥拝所大鳥居設立

開拓が進むにつれて、各地から、それぞれの習慣を持った人が集まってきました。地域がにぎやかになる一方で、開拓をするお百姓の生活は、いつも厳しいものでした。その様子を見て、安積国造神社の宮司・安藤脩重と、大槻村の名主であった相楽半右衛門、そして開成社の人たちは「人々が、心をひとつにできるよう、みんなが手を合わせて祈ることができる遥拝所を、ぜひとも作ってください。苦勞の多い開拓生活の、心のよりどころにもなるはずです」と、中條に言いました。中條も「それは、神様を敬い、国を愛する精神につながる良い考えだ」として賛成しました。

大槻原を見わたすと、その一角に、うっそうとした樹木に囲まれた小さな丘がありました。離れ森と呼ばれていたその場所が適当であるとして、明治6年、開成社の寄付により、大きな鳥居が立てられ、遥拝式が行われました。「春と秋の参拝日には、梅や桜、桃、梨などの花木を、一村二株ずつ献納すること」「花木の枝を折ったら、その償いとして、さらに一花を植えること」などの決まりごとでも定められました。地域の人々の喜びようは、大変なもので、開成社準社長であった嶋原弥作の日記には「初日の参拝者3万人、3日間で6万人が訪れ、ともに祝った」と書かれています。

このときの人々の熱意は、次の、本格的な神社の造営をもたらすこととなります。



だいじんぐうこんりゅう せんざさい 大神宮建立と遷座祭

ようはいじょおおとりい こんりゅう どうじ たか ほんかくてき じんじゃぞうえい
遥拝所大鳥居の建立と同時に高まった、本格的な神社造営への
きうん やすば なかじょう かいせいしゃ ぐたいてき けいかく ちやくちやく すす
気運は、安場・中條と開成社によって具体的な計画となり、着々と進
められました。かいせいざんだいじんぐう こんりゅう はいでん ほんでん けんちく けいだい
開成山大神宮の建立です。拝殿・本殿の建築や境内の
ぞうせい かいせいしゃ きしん じんじゃぞうえい こころま ちいき ひとびと
造成などは、開成社の寄進と、神社造営を心待ちにする、地域の人々
の寄付でまかなわれました。

めいじ ねん がつ かんせい すがすが やしろ かみさま まね いせ
明治9年9月、完成した清々しいお社で、神様をお招きする、伊勢
じんぐうみたましろほうせんちんざしきてん せいだい おこ いせじんぐうちょう
神宮御霊代奉遷鎮座式典が盛大に行われました。伊勢神宮庁からは、
たなかそうさい にん しんかん ずいこう
田中総裁ほか6人の神官も随行されました。

いわ さいじ いつ かかん ひとびと かんせい
このお祝いの祭事は、5日間にもわたり、人々の歓声のなか、たくさ
はなび う あ ふえ たいこ ほうのう おど く ひろ
んの花火が打ち上げられました。笛や太鼓、奉納の踊りなども繰り広
げられました。このとき、だいじんぐう さんけい ひと けんないぜいき なんまん
大神宮に参詣した人は、県内全域から何万
にん にものぼったと記録されています。かいせいしゃ じんじゃ いじひ
開成社では、神社の維持費にあ
てるため、ちやう たんぶ きふ
たんぼ4町8反歩を寄付しました。

いらい かいせいざんだいじんぐう ちいき ひとびと こころ ふか
以来、開成山大神宮は、地域の人々の心のよりどころとなり、深く
うやま した
敬われ、また親しまれています。

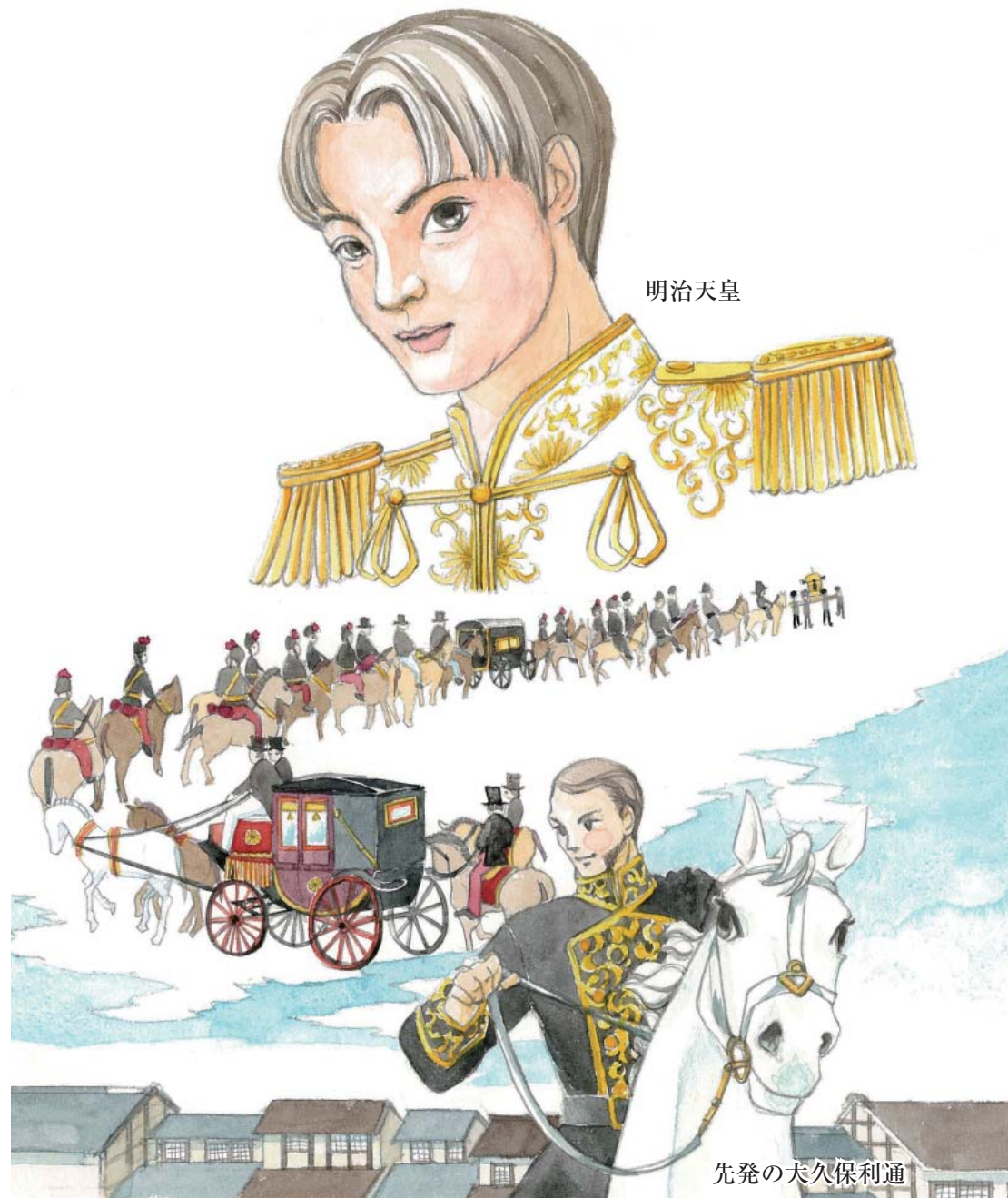
かいせいかん らいりん けってい 開成館ご来臨の決定

かいせいしゃ れきし なか は めいじてんのう
開成社の歴史の中で、もっとも晴れがましいできごとは、明治天皇
らいりん
のご来臨をいただいたことです。せいふ ぼしんせんそう かんぐん
政府は、戊辰戦争で官軍にやぶれ、
いたで のこ とうほく ち てんのう しさつ はげ
その痛手の残る東北の地を、天皇がじかに視察することで、励まし、
じんしん あつ さんぎょうしんこう
人心を集め、さらには産業振興にはずみをつけようとしたのです。

めいじ ねん がつ てんのうじゅんこう ないよう けんとう
明治9年5月、天皇巡幸について、その内容が検討されました。
とうしょ こおりやま かいどうちか こおりやましようがっこう きゅうけい かいたくち
当初、郡山は、街道近くにあった郡山小学校での休憩のみで、開拓地
しさつ よてい あべもへえ しぎはらやさく
の視察は予定されませんでした。そこで、阿部茂兵衛と嶋原弥作ら
かいせいしゃ だいひょう わたし しざい かいたく
開成社の代表は、「私たちは、たましいと私財をなげうって、開拓の
だいじぎょう き せい か てんのう らん きかい
大事業につとめて来ました。その成果を、天皇にご覧いただく機会は、
こんかい のが に ど けん たい きょうりよく はたら
今回を逃したら二度とないでしょう」と、県に対して、強力に働きかけ
おこな を行いました。これまでのいきさつや、開成社の苦労を知る県は「その
ねが じつ かいたくち しさつじつげん ちから つ
願いは、実にもっともである」として、開拓地の視察実現まで、力を尽
くしてくれました。

めいじ ねん がつ てんのうじゅんこう しゅうかんまえ かいせいかん てんのう しゅくはくじょ
明治9年6月、天皇巡幸の2週間前に、「開成館を天皇の宿泊所と
する」との知らせが届きました。開成社では、大きな喜びにわき上がる
し とど かいせいしゃ おお よろこ あ
とともに、その準備に大わらわ。近辺の道路を補修し、新たに橋を架
かいせいかん おおそうじ あ く
け、開成館の大掃除に明け暮れました。

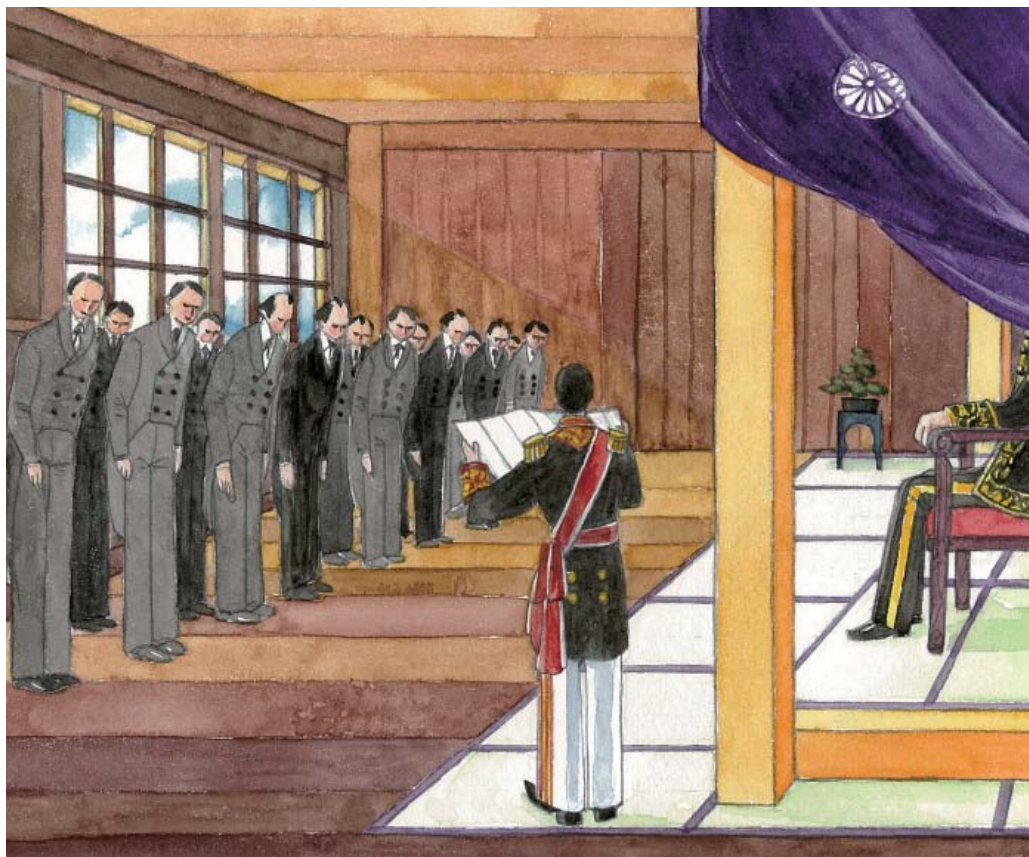
すうじつ ないむきょう おおくぼとしみち じゅんぴ かくにん うま か
数日すると、内務卿・大久保利通が、準備の確認のため、馬を駆り
こおりやま おおくぼ てんのう とお みちすじ せいそう
郡山にやってきました。大久保は、天皇がお通りになる道筋の、清掃
かざ けん やくにん もう つ こおりやまぜんいき
と飾りつけを県の役人に申し付けました。これにより、郡山全域で



そうじ かたづ まちな せいぜん うつく けいかん
掃除と片付けがおこなわれ、街並みは、整然とした美しい景観となり
ました。

かいせいかん にん ほ う し 開成館にて25人にご褒詞

めいじ ねん がつ にち ごぜん てんのうじゅんこう いっこう こおりやま つ
明治9年6月16日午前、天皇巡幸のご一行は、郡山にお着きになりました。25さいのおわか めいじてんのう どうだ ばしや の
なり、これに従う総勢200名もの供奉人は、その頃まだ珍しかった
ようふく み つつ うま れつ いげん み きんだいてき
洋服に身を包み、馬で列をなしていました。威厳に満ちた、近代的で
さっそうとしたその行列は、郡山の人々の目に、新たな時代の到来を
し 知らせ、実にまぶしく映ったに違いありません。ご一行は、郡山学校
やす ひるごろ かいせいかん とうちやく
でお休みになり、お昼頃に開成館に到着しています。



洋風建築の金透小学校



めいじてんのう なかじょうまさつね せつめい みはら よ かいせいかん かい
明治天皇は、中條政恒の説明により、見晴しの良い開成館の3階から、見事に造成された開拓田とその佃戸集落を熱心にご覧になりました。開成社の一同は、揃いの礼装で身をととのえ、天皇との謁見にのぞみます。そして、右大臣・岩倉具視から、開拓への献身と努力をねぎらう、天皇のお言葉が伝えられました。なれない開拓事業に苦難続きであった開成社の人々に、その言葉は、どれほどあたたかく、心をうる潤わせるものであったでしょう。謁見を終えて、開成館を後にした一同は、感激のあまり抱き合って涙したそうです。天皇はこの日、開成館にお泊まりになりました。

よくじつ かいせいかん た いっこう さいど こおりやまがっこう た よ
翌日、開成館を發たれたご一行は、再度、郡山学校に立ち寄って、
がくどうせいと たいそう らん ふくしま む
学童生徒の体操などをご覧になり、福島へ向かわれました。

こおりやまがっこう みよだゆたかこうちょう いっこう くわ ないかく
このとき、郡山学校の御代田豊校長が、ご一行に加わっていた内閣
こもん きどたかよし がっこう めいめい ねが で いま な つた
顧問・木戸孝允に、学校の命名を願い出ました。今もその名が伝わる
きんとう
「金透」は、このとき木戸により名付けられたものです。

かいせいしゃ あさかそすいきこう
開成社をはずみに、安積疏水起工

いなわしろこ みず あさかへいや ひ
「猪苗代湖の水を、安積平野に引くことはできないだろうか」…
まいとし みずぶそく なや おおひと ほうふ
毎年のように水不足に悩まされていたことから、多くの人が、豊富な
いなわしろこ みず ゆめ たく かんが すいろ
猪苗代湖の水に夢を託し、いくつものプランが考えられました。水路
けんせつ そくりょう おこな ひと やまご だいこうじ
建設のための測量を行った人もいます。しかし、山越えの大工事は
とほう しきん ひつよう じつげん
途方もない資金が必要なため、実現にはいたりませんでした。

かいせいしゃ かいたく ひつようせい と じぎょう ちから つ なかじょうまさつね
開成社に開拓の必要性を説き、その事業に力を尽くしていた中條政恒
いなわしろこ みず きたい よ ひとり かれ せいふ ようじん
も、猪苗代湖の水に期待を寄せる一人でした。彼は、政府の要人・
おおくぼとしみち てんのうじゅんこう したけんぶん こおりやま おとず
大久保利通が、天皇巡幸の下検分で郡山を訪れたとき、そのこと
ねっしん しんげん みず おおつきばら ふく ひろ
を熱心に進言しました。水さえあれば、大槻原を含む、さらに広い
ちいき かいたく ぜんこく せいかつ こま さむらい
地域の開拓がかなうこと、そして、全国で生活に困っているお侍とそ
かぞく よ よ しごと く ば つく だ
の家族を呼び寄せれば、仕事と暮らしの場が作り出せることなど。
おおくぼ すす かいせいしゃ かいたくでん みずか しさつ
大久保は、すでに進められていた、開成社の開拓田を自ら視察しまし
た。もはや原野の面影もないほどに、良く耕されたその風景に、彼は
ちいき ひとびと ねつい かのうせい はだ かん と
地域の人々の熱意と可能性を、肌で感じ取りました。

かんどう う こころ き おおくぼ じゅんこうご めいじてんのう
このときの感動を受けて心を決めた大久保は、巡幸後、明治天皇に
「さらに大規模な安積開拓には、猪苗代湖より水を引かねばなりません
しんげん とうじせいふ くに だいきぼかいたく こうほち
」と進言しています。当時政府は、国による大規模開拓の候補地を
も こおりやま あさかへいや だいいち しゅちよう
いくつか持っていました。郡山の安積平野こそ第一」と主張したの
おおくぼとしみち かいせいしゃ はじ おおつきばら かいたく
が、大久保利通だったのです。開成社により始められた大槻原の開拓
あさかそすいかいさく い だいじぎよう よ よ
が、安積疏水開削と言う大事業を呼び寄せました。



おおくぼとしみち めいじ ねん さい あんさつ ちよくぜん
大久保利通は、明治11年に49歳で暗殺されますが、その直前
かいだん あさかかいたく かんけいしゃ おおくぼな
に会談していたのは、安積開拓の関係者でした。大久保亡きあとも、
なかじょう せつきよくてき はたら つづ めいじ ねん がつ あさかそすい
中條らの積極的な働きかけは続けられ、明治12年10月、安積疏水
きこうしき むか
は起工式を迎えます。

あさかそすいきこうしき わか ひ いうひろぶみ 安積疏水起工式と若き日の伊藤博文

めいじ ねん がつ あさかそすい きこうしき かいせいざんだいじんぐうまえ おこな
明治 12 年 10 月、安積疏水の起工式が開成山大神宮前で行われ、
さんれつ おお ひと こうじ ぶ じ そうきかんせい きがん
参列した多くの人により、工事の無事と早期完成が祈願されました。
そすい せつけい じんぎし やまだ
疏水ルート設計には、オランダ人技師ファン・ドールンはじめ、山田
とらきち にほんじんぎじゅつしゃ
寅吉ら日本人技術者があたりました。

きこうしき れっせき めいじせいふ ようじん なか おおくぼとしみち
起工式に列席した明治政府の要人の中には、大久保利通のころ
ざしをついだ、さい ないむきよう いうひろぶみ かいせいざんだいじんぐう
38 歳の内務卿・伊藤博文もいました。開成山大神宮
では、このとき、いうひろぶみ さいしゅ りんじさい おこな
伊藤博文を祭主とする、臨時祭をとり行っています。
きこうしき りんじさい しゅくがこんしんかい ひら
起工式と臨時祭のあとには、祝賀懇親会が開かれました。こちらに
は、100 名を越す人が集まって、大いににぎわいました。この懇親会
を主催した開成社では、しゅさい かいせいしゃ よそう うわまわ さんかしや りようり さけ た
予想を上回る参加者に、料理とお酒が足りな
くならないよう、しょうてん はし まわ きゅう てはい
商店を走り回って急きょ手配をするなど、てんてこま

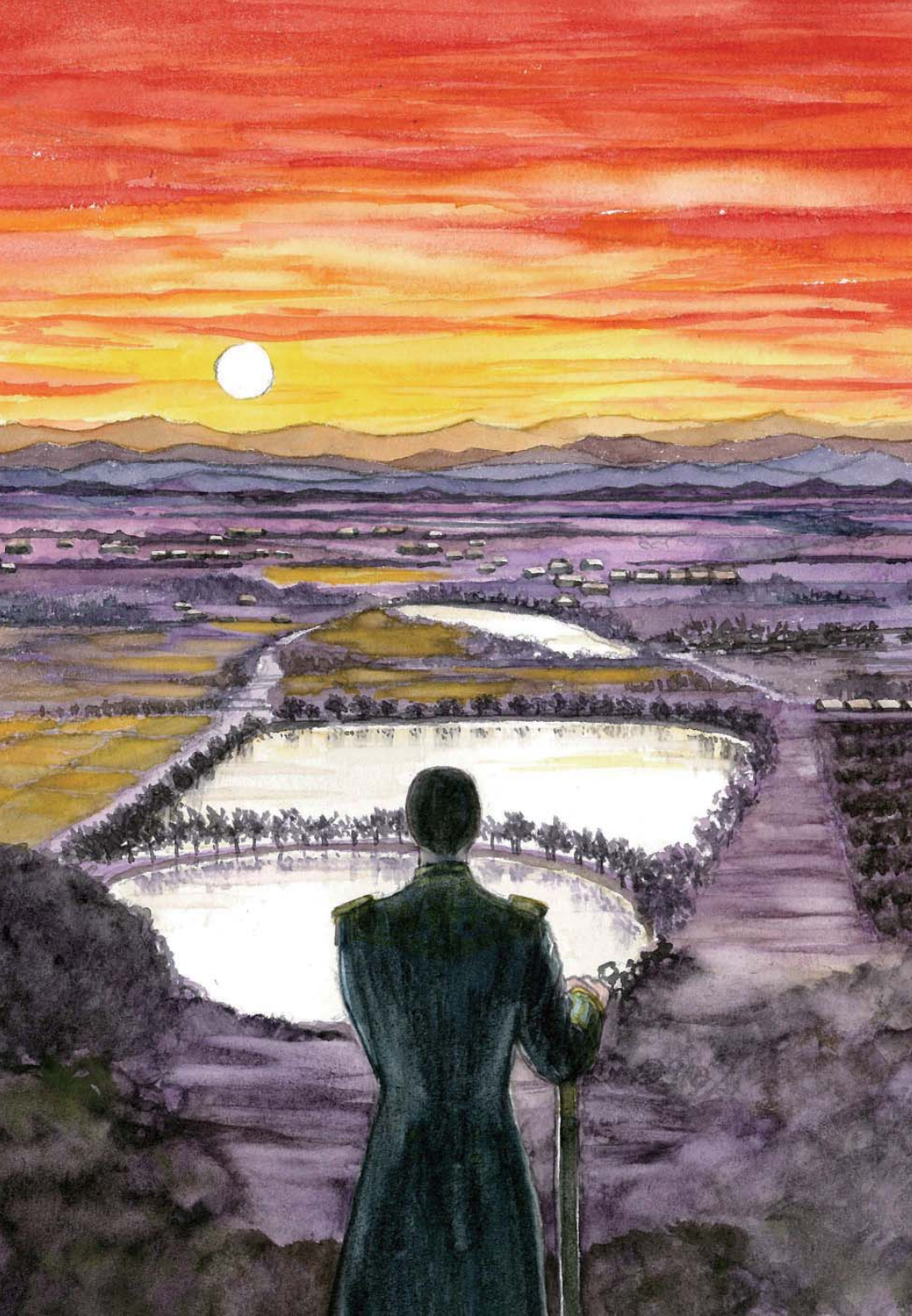
山潟取水口付近



いそが くの ばん おおあ てんき
いの忙しさとなりました。加えてこの晩は、どしゃぶりで大荒れの天気
だったそうです。

このとき、こおりやま ひとびと かんげい う いう
郡山の人々の、あたたかいもてなしと歓迎を受けた伊藤
博文から、かいせいしゃ きしん いうひろぶみ だいにっほんていこくけんぽう
開成社に寄進がありました。伊藤博文が、大日本帝国憲法
の近代的な内閣制度のもと、しやだいないかくそうりだいじん
初代内閣総理大臣になったのは、この 6
ねんご
年後のことです。

あさかそすい しさつ まつかたまさよし おおくらたゆう てらしむねのり
安積疏水の視察には、ほかに、松方正義大蔵大輔や寺島宗則
がいむきよう すぎまごしちろうたゆう ゆりこうせい だじょうかんぎかん しながわやじろうないむしょう
外務卿、杉孫七郎大輔、由利公正太政官議官、品川弥二郎内務省
ほ かのうきよくちよう おとず かいせいしゃ た よ げきれいいもん ゆ
輔勸農局長なども訪れ、開成社に立ち寄り、激励慰問して行きました。
とうきよう おうふく いっしゅうかん い ころ せいふようじん
東京からの往復に、一週間かかったと言われるこの頃、政府要人が
つぎつぎ おとず あさかかいたく めいじせいふ きたい おお
次々に訪れたことは、安積開拓への明治政府の期待の大きさがうかが
えます。



さいど じゅんこう 再度の巡幸

めいじ ねん がつ めいじてんのう ど め とうほくちほうじゅんこう た
明治 14 年 6 月、明治天皇は、2 度目の東北地方巡幸にお発ちにな
られました。今回は、一度目のご巡幸で訪れることのできなかった、
あきた やまがた た よ ごおりやま かえ みち がつ とうちゃく
秋田・山形にも立ち寄られ、郡山へは、帰り道となる 10 月に到着さ
れています。この当時は、国をあげての大事業・安積疏水の完成を
よくとし ごおりやま かつき じんこう にん
翌年にひかえ、郡山は活気にあふれていました。人口 5000 人のとこ
ろに、きゅうしゅう しこく ぜんこく はん にん ひと いじゅう
九州や四国など全国 9 つの藩から 2000 人もの人に移住して
きたのです。

がつ いつか じゅんこう いっこう かいせいがん とうちゃく あべもへえ かいせい
10 月 5 日、巡幸のご一行は、開成館にご到着。阿部茂兵衛ら開成
しゃ ひと おお よろこ でむか ねん
社の人たちは、大きな喜びとともに出迎えました。5 年ぶりに、ふたたび
かいせいがん かい のぼ しゅうらく ひら かいたくむら
開成館の 3 階に登られて、集落ができ、すばらしく開けた開拓村の
ふうけい らん めいじてんのう たいへんまんぞく ようす つた
風景をご覧になった明治天皇は、大変満足されたご様子であったと伝
えられています。「開成社の事業をはじめて以来、そのまじめな取り組
みにより開拓を進め、よく努めてくれた。なお、さらに励むように」…
てんのう とも おおきたかとうさんぎかん とお いちどう ほめ
天皇のお供である、大木喬任参議官を通して、一同はねぎらいとお褒
めのことば
め言葉をいただきました。

ごてんのう せいふ よ きゅうしゅう いじゅう
その後天皇は、政府の呼びかけにこたえて、九州から移住してきた
ひとびと あつ くるめかいこんしゃ きゅうけい
人々が集まる、久留米開墾社でご休憩されています。

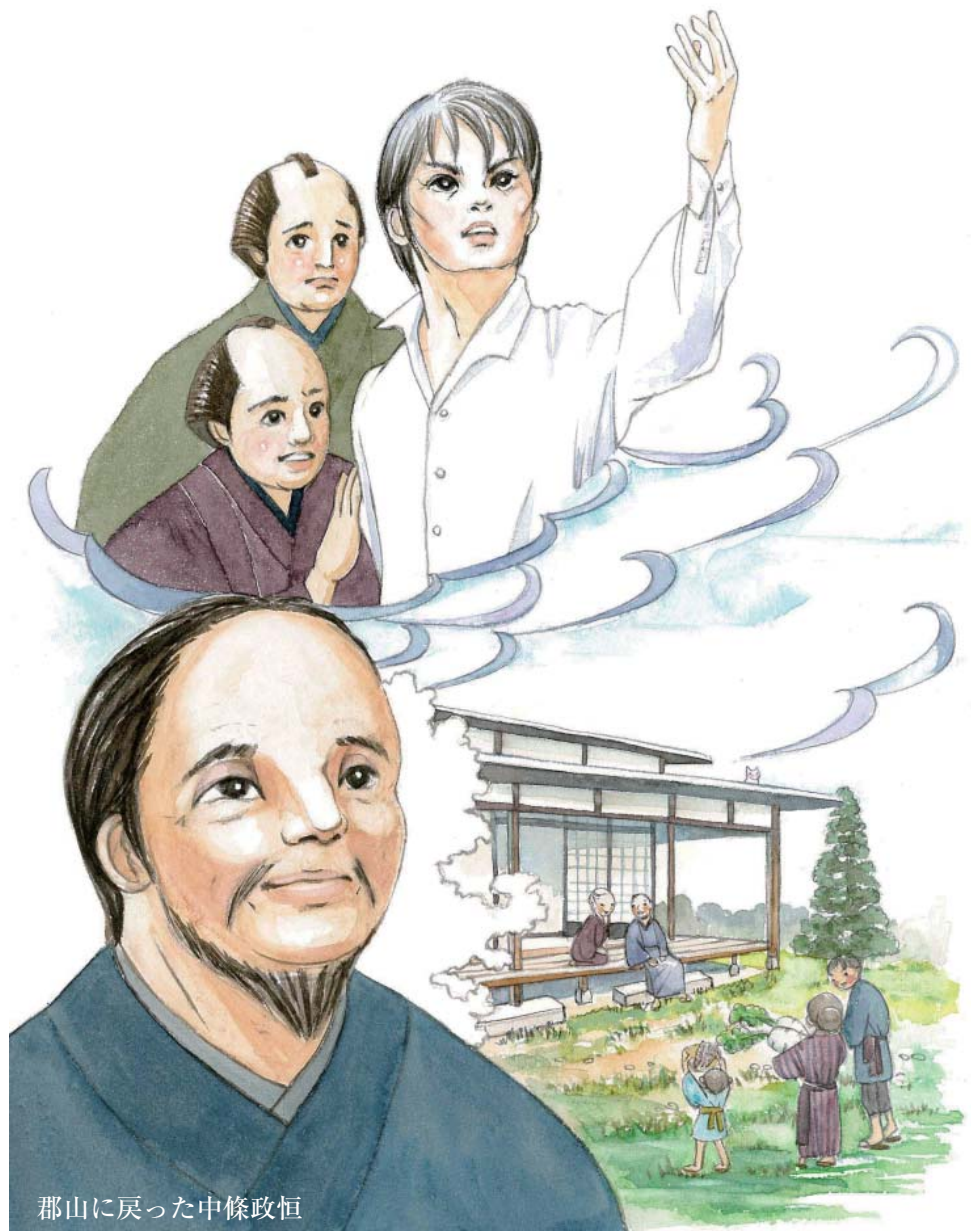
すうじつご かいたくしやうれい のうぐりよう か し だいひよう あべもへえ
数日後、開拓奨励の農具料が下賜され、代表して阿部茂兵衛がこれ
う と
を受け取りました。

やすば なかじょう わか 安場、中條との別れ

あさかそすい けんせつじゅんび みまも かいせいしゃ おおつきばらかいたく どくじ
安積疏水の建設準備を見守りながら、開成社の大槻原開拓は、独自
すす めいじ ねん おおつきばら いなだ ちょう やく ヘクトル
に進められました。明治 13 年には、大槻原の稲田 61 町 (約 60ha) に
いっせいに たう ととの なが かいたく
いっせいに田植えが整い、すばらしい眺めとなりました。これは、開拓
かいしいらい ろうほう とし とうきょう うえの かいさい こくない
開始以来の朗報です。この年にはまた、東京・上野で開催された国内
かんぎょうはくらんかい かいたくち しゅうかく こめ ちゃ きいと しゅっぴん
勧業博覧会に、開拓地で収穫された米やお茶、生糸を出品しています。
ねんまつ ちょうさ ひゃくしゅう かいせいしゃ りえき だ
年末の調査では、お百姓も開成社も、はじめて利益を出しました。

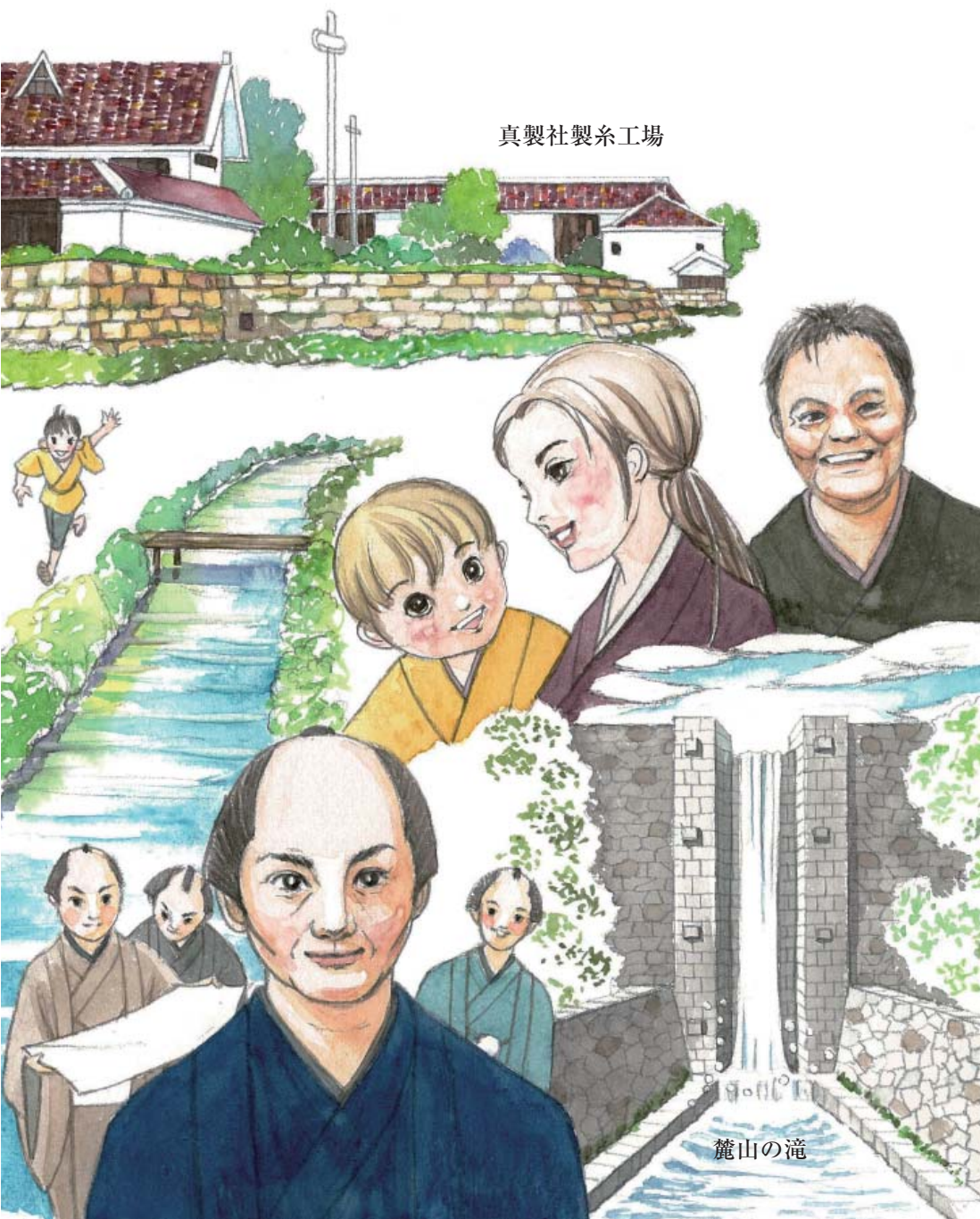
いっぽう あさかかいたく ゆめ えが ぜんしんぜんれい じんりよく やすばやすかず
一方で、安積開拓を夢に描き、全身全霊で尽力した安場保和と
なかじょうまさつね いどう ち はな ゆ めいじ ねんやすば
中條政恒は、異動によりこの地を離れて行きました。明治 9 年安場は
あいちけん めいじ ねん なかじょう だじょうかんきんむ とうきょう てんにん
愛知県に、明治 14 年には中条が太政官勤務となり東京へ転任してい
ます。せいだい ひら そうべつかい かいせいしゃ くわ じもと ひとびと あつ
盛大に開かれた送別会では、開成社に加え地元の人々も集まり
きて たが なごり お あさかそすい かんせい みとど
来て、互いにその名残を惜しみました。安積疏水の完成を見届けずに、
この地を離れなければならなかった中條の思いは、いかばかりであっ
たことでしょう。

ひとびと なかじょう けんしん わす ねん
しかし人々は、中條の献身を忘れることはありませんでした。12 年
ご やまい え たいかん ようりょう つづ かれ かいせいしゃ おおつきばらしゅうへん
後、病を得て退官し、療養を続けていた彼に、開成社と大槻原周辺
そんちょう こおりやま もど くだ ねっしん てがみ か
の村長たちは「ぜひ、郡山へお戻り下さい」と、熱心に手紙を書きまし
た。こえ あさかちほうぜんいき ひろ めいじ ねん なかじょう
た。その声はやがて、安積地方全域に広がり、明治 30 年、中條とそ
かぞく あいちゃく なつ こおりやま いじゅう かいせいしゃ
の家族は、愛着ある懐かしい郡山に移住がかなったのです。開成社で
かんしゃ こ いえやしき でけいやま さんちょう とち おく
は感謝を込めて、家屋敷とともに、出磬山の山頂の土地を贈りました。
わか ひ なかじょう よ りかいしゃ やすば かいたく ろん
そこは、若き日の中條が、良き理解者であった安場と開拓を論じあい、



郡山に戻った中條政恒

じつげん むね ちか おも で ばしよ みずか しんしん
その実現を胸に誓った思い出の場所でした。自らの心身をそそいだ
あさかかいたく ゆた ひら おお はってん まち かれ ひとびと
安積開拓により、豊かに開け、大いに発展したこの街で、彼は、人々
した おだ ばんねん おく
に慕われながら、穏やかな晩年を送りました。



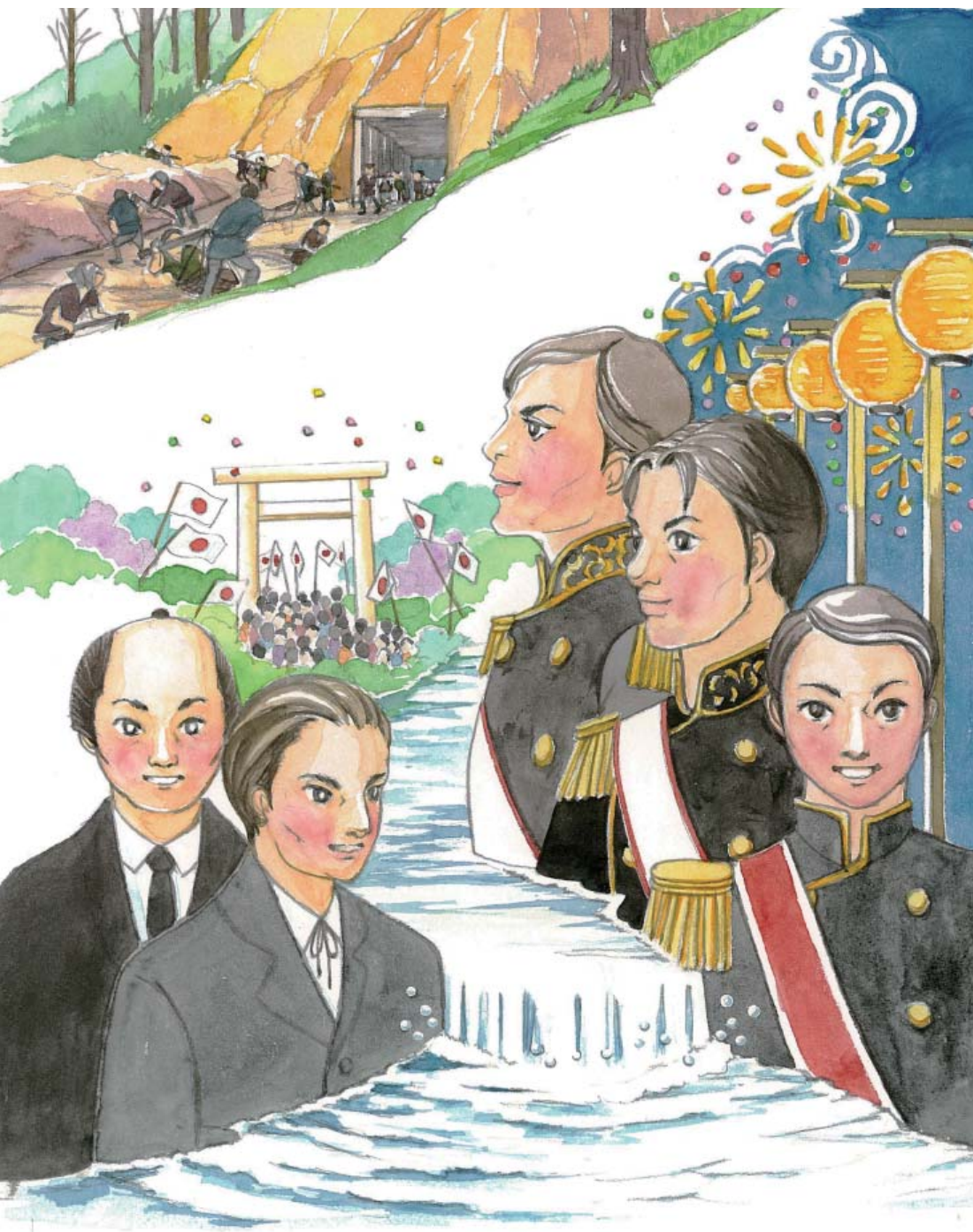
真製社製糸工場

麓山の滝

こおりやましせんせつち はやま たき 郡山支線設置と麓山の滝

めいじ ねん ふゆ あさかそすい こうじ すす すいろ ただの
明治14年の冬、安積疏水の工事が進んできて、その水路は多田野
までのびていました。あさかそすいほんらいのうぎょうようすいきたいた
安積疏水は、本来、農業用水に期待されて立て
られた計画でしたが、みずえいせいじょうかぼうかやくだくわ
水は、衛生浄化や防火にも役立ちます。加えて
こおりやまとうじはながたさんぎょうせいしこうじょうしゃたんじょう
郡山には、当時の花形産業である製糸工場が2社、誕生していました。
こうぎょうようほうふみずかくほひつようこはらだ
工業用にも、豊富な水の確保はぜったいに必要です。そこで、小原田
よこづかちくだいひょうはなあただのちないかいたくでん
や横塚地区の代表とも話し合い、多田野地内から開拓田をふくむ
あさかへいやえんちょうぶんすいきんねがとき
安積平野に延長分水してくれるよう、県にお願いをしました。この時、
とりまとめをし、がんしよていしゅつかいせいしや
取りまとめをし、願書を提出したのも開成社です。

ねっしんはたらみむすこおりやまちくたはたあさかそすいしせん
熱心な働きかけは実を結び、郡山地区の田畑に、安積疏水の支線が
ながこあべもへえすいろしがいち
流れ込むことになりました。阿部茂兵衛は、この水路を、市街地にあつた公園まで引いて滝にしました。彼には、滝の落差を利用する、発電
こうえんひたきかれたきらくさりようはつでん
事業のアイデアがあったのです。当時の製糸工場などは機械化が進め
じぎょうとうじせいしこうじょうきかいすすす
られていて、その動力となる電気に、阿部は商人として、大きな関心を
もっていました。しかし、けっかこおりやまちくこうぎょうようはつでんじつげん
結果として郡山地区で工業用の発電は実現
げんざいはやまこうえんないはやमतakitakayama
せず、現在の麓山公園内の「麓山の滝」となり、訪れる人に四季のやす
らぎをていきよう
提供しています。



あさかそすいしゅんこう 安積疏水竣工

めいじ ねん がつ すいろ ほんせん しせんけい キロメートル しょ
明治 15 年 10 月、水路の本線・支線計 130km、トンネル 37 カ所
の、こっか だいじぎょう あさかそすい かんせい かいせいかん せいだい つうすいしき おこな
国家の大事業・安積疏水が完成し、開成館で盛大な通水式が行
われました。これにより、やく 3000ha の田畑に猪苗代湖の水が行き
わた
渡りました。

かいせいしゃ めんめん しきてん そう きょうりよく かいせいざんだいじんぐう りんじ
開成社の面々は、式典に総がかりで協力し、開成山大神宮の臨時
たいさい おこ しゆく せいふちよくえい かつきてき じぎょう
大祭を行うなどして、これを祝しました。政府直営の画期的な事業で
あったことから、いわくらともみうだいじん まつかたまさよしおおくらきょう せいふ ようじん
岩倉具視右大臣や松方正義大蔵卿ら、政府の要人
もたすうさんれつ きんりん じゅうすうまんにん ひとびと お よ こおりやま
多数参列したほか、近隣からも十数万人の人々が押し寄せて、郡山
はくうぜん のにぎわいになったそうです。記録には「花火と装飾灯で、夜も
はんか きわ ひとびと かんせい き かいせいしゃ ひと
繁華を極めた」とあります。人々の歓声を聞きながら、開成社の人たち
も、どれほどのよろこ 喜びをかみしめたことでしょう。あさかそすい かんせい
安積疏水の完成は、その
ご おお はってん こおりやま みらい かくやく おな
後大いに発展する、郡山の未来が確約されたのも同じでした。「ふるさ
とのく らしをゆた 豊かにしたい」との思いから、かいせいしゃ ひとびと じっこう
開成社の人々が実行して
きたかいぶつせいむ せいしん みごと たいりん はな さ
「開物成務」の精神が、見事な大輪の花を咲かせたのでした。

その後の郡山

開成社の人々が、心を尽くして開拓につとめた明治期から、大正・昭和を経た今、郡山は大きな躍進をとげています。大槻原開拓をきっかけとする、安積疏水の完成は、かつて「安積三万石」と言われたやせた大地を、「三十万石」の収量を誇る、全国有数の米どころに育てました。また、豊富な水は、農業以外にも利用され、明治32年の水力発電所の設置により、製糸工場や化学工場が進出しました。疏水はまた、飲用水にもなり、人々の暮らしを清潔で便利なものに変えました。

昭和40年には周辺町村と大合併し、郡山は人口で東北第2位の街となり、以来『経済県都』の地位を確立しています。これらは全て、豊富な水がもたらした、たまものです。

そして今でも、郡山の街に、開成社のころざしは息づいています。大槻原の開拓でひらかれた土地は、現在の開成1丁目から6丁目にあたり、当時、人馬が行き来した開拓道路は、国道49号となりました。また、常に開拓推進の中心であった開成館は、福島県の重要文化財に指定され、安積開拓の資料館として、先人たちの苦労と功績を伝えています。

開成山大神宮の敷地には、「安積開拓の父」と称される中條政恒の顕彰碑と、阿部茂兵衛の銅像が建てられ、今なお開け行く郡山を見守っています。そして大神宮拝殿には、大久保利通と開成社25人の肖像画が安置されています。



平成の開成館

阿部茂兵衛像

中條政恒顕彰碑

安積疏水通水の象徴である「麓山の滝」は、平成3年に復元工事が行われ、国の登録有形文化財に指定されました。



みらい 未来へ

そしてもうひとつ、^{かいせいしゃ}開成社の人たちが、^{こうせい}後世に生きる^{わたし}私たちや、^{みらい}未来の子供たちのために^{のこ}残したものがああります。それが、^{まいとしらんまん}毎年爛漫と^{はなひら}花開く、^{かいせいざん}開成山の桜です。「^{わたし}私たちの代では^{ちい}小さな^{なえぎ}苗木でも、^{たいじゅく}やがて大樹となり、^{うつく}美しい^{はな}花は、^{ひとびと}人々の心を^{こころ}なごませるだろう」...。そう話し合っ
て、^{かいせいしゃ}開成社では、^{かほく}花木の^{しょくじゅ}植樹を^{しゃそく}社則に^{さだ}定め、^{めいじ}明治9年の^{ねん}天皇ご^{てんのう}巡幸の
^{きねん}記念や、^{めいじ}明治11年に、^{いま}今の^{かいせいざんこうえん}開成山公園と^{だいじんぐう}大神宮のまわりに、^{まんぼん}2万本を
^{さくら}こえる桜を^{しょくじゅ}植樹しました。

^{せい}21世紀の^{げんだい}現代にいたるまで、^{はな}花の^{きせつ}季節になると、^{まいとしおおぜい}毎年大勢の^{しみん}市民が
^{さくらなみき}その桜並木を^め愛で、^{さんさく}散策を^{たの}楽しんで^{あべもへえ}できました。^{かいせいしゃ}阿部茂兵衛ら開成社の
^{そうししゃ}創始者たちは、その^{ふうけい}風景を、^{ねんまえ}140年前すでに^{おも}思い描いていたのでしょ
^{こんなん}う。困難な^{かいたくじぎょう}開拓事業を^な成し^と遂げた、^{にん}25人の^{しょうにん}商人たちの^{おも}思いを^{やど}宿し、^{いま}今
^{つた}に^{ほん}伝わる1300本の^{さくら}桜は、^{ことし}今年も^は晴れやかに^{まんかい}満開の^{むか}ときを迎えます。

^{だい}代を重ねて、^{かさ}開成社は^{かいせいしゃ}今も^{いま}存続しています。^{そんぞく}小さな^{ちい}苗木が、^{なえぎ}未来に
^{おお}大きく^{はなひら}花開くように、また^{あら}新たな^{かいぶつせいむ}「開物成務」の^{みらい}こころざしが、^{みらい}未来に
^う受け^つ継がれて^ゆ行くのです。

WEB版絵本「開成社ものがたり」

2009年3月29日発行

発行 合名会社 開成社

制作 ケイシイシイ株式会社 こおりやま情報編集室

原稿・イラスト 塚本禎子

©開成社

※発行社の許可なしに営利目的で使用することを禁止いたします。

イラスト資料協力

福島県広報課・郡山市公聴広報課・郡山市開成館・郡山市歴史資料館・
開成山大神宮・郡山市立金透小学校・郡山市立開成小学校